

第五届中国琉球历史关系学术研讨会

福州—泉州

福建省社会科学院 福建师范大学 联合主办
泉州海外交通史博物馆 华侨大学

24—27/11/1994

第五届中琉历史关系学术研讨会日程	1
会议日程	2
第五届中琉历史关系学术研讨会论文目录	

陈捷先	谈清代成书的几种琉球方志	6
系数兼治	《呈禀文集》について	8
刘蕙孙	在元代琉球群岛的部落政权已与中国发生朝贡关系的一个旁证 ——浦添市博物馆大量“元押”的发现	10
窪德忠	琉球文化の复合性	12
王耀华	琉球的复合性艺能文化与中琉音乐之比较研究	14
徐艺圃	来华琉球难民的“急救篇”——《汉文集》内容评述	16
曹永和	琉球的朝贡贸易与东亚海域交易圈	18
林庆元	明清册封琉球“仪注”考述	20
照屋善彦	琉球におけるペリーとベッテルイム——米提督と英宣教医 1853-54年	22
上里贤一	琉球官生毛世辉の汉诗について	24
黄裔	论中国诗歌对琉球汉诗的影响	26
郑工	论琉球王朝时期绘画中的禅道思想	28
西里喜行	毛风来（富川盛奎）の清国亡命事件とその周辺——新たな救 国请愿書の紹介を兼ねて	30
高良仓吉	首里城とその复元方法——特に复元の时代设定をめぐって	33
郑国珍	琉球进贡使者的多种崇仰习俗及在榕与之相关的史迹考	35
秦国经	中国第一历史档案馆所藏清代中琉关系档案论述	37
赤岭守	《历代宝案》編集事业とその課題	39
孙薇	辽宁省档案馆所藏の明代の中琉关系史料及びその启示	41
庄伯和	福州土猫及其他	43
徐晓望	琉球与福建女神信仰之比较	45
吴屋义胜	冲绳古来の墓式と葬法・副葬品 ——宜野湾市真志喜安座间原第一遗迹の检讨から——	47
胡沧泽	琉球官制略论	49

吴 霭华	论明清时代琉球朝贡团之组织	51
方 宝川	关于明初闽人移居琉球若干问题的再思考	53
林 伟功	明清琉球朝贡与福州港的繁荣	55
赖 正维	清代福建委派官员护送琉球使臣赴京考	57
松 浦章	关于乾隆十四年中国商船漂到琉球	59
周 光斗	中琉经贸史	61
傅 朗	清代中国药材输入琉球考	63
宇江喜ちか子	琉球時代の服飾にみる咒术及び辟邪の思想	65
宫城昌保	琉球と中国の交流史にみる食文化の影響	67
李 少雄	略论明清时期中国物质文明对琉球的传播和影响	69
李 天锡	明清琉球华侨的构成及其对中国传统文化的传播	71
川胜 守	《华夷变态》と清・琉球册封关系の形成	73
沈 玉水	泉州与琉球友好往来五大事	75
杨 仲揆	徐葆光在琉球	77
陈 培坤	琉球人来华与清朝中央政府各机构之关系考	79
谢 必震	齐鲲与《东瀛百咏》	81
池宫正治	琉球王府の朝贺と进贡	83
徐 玉虎	明琉球国王世子尚丰请封袭爵考	85
杨 彦杰	明清之际的中琉关系——以琉使入贡为中心	89
郑 梁生	明廷对琉球贡使的处置	91
丰见山和行	琉球国の进贡贸易における护送船の意义について	93
徐 恭生	清代琉球接贡制度	95
林 金水	近年来福州仓山琉球墓碑的新发现	97
参会代表名单		98

【 范国仙、邱岭负责本次会议论文提要的中、日文互译工作，在此谨表谢忱。 】

第五届中国琉球历史关系学术研讨会日程

11月23日	会议报到	21:00——21:45 预备会议
11月24日	8:30 ——9:10 9:10 ——12:10 12:10——13:30 13:30——17:10 19:00——20:30	会议开幕 会议发言（第一、二分会场各6人） 午餐 会议发言（第一、二分会场各7人） 晚宴
11月25日	7:30 ——12:00 12:00——13:00 13:00——	参观鼓山、琉球馆。 午餐 参观琉球墓园后赴泉州
11月26日	8:30 ——11:40 12:00——13:30 13:30——17:30 18:00——19:00 19:30——21:00	会议发言（第一、二分会场各6人） 午餐 参观海外交通史博物馆、开元寺、古船馆、 天妃宫、来远驿遗址。 晚餐 文艺节目
11月27日	8:30 ——12:10 12:10——13:30 13:30——15:10 15:10——15:30 15:30——16:30 18:00——20:00	大会专题发言（4人） 午餐 大会专题发言（2人） 会间休息 会议闭幕式 晚宴
11月28日	各代表返回	

第五届中国琉球历史关系学术研讨会

会议日程

11月23日	会议报到	21:00—21:45	预备会议
11月24日	8:30—9:10	会议开幕	
	(主席: 王耀华	翻译: 邱岭、范闽仙)	
致词:	严正 高宫广卫 张希哲 徐艺圃		
	9:10—10:30	会议发言	
第一分会场	(主席: 徐恭生	翻译: 赤岭守)	
陈捷先	谈清代成书的几种琉球方志		
系数兼治	《呈稟文集》について		
刘蕙孙	在元代琉球群岛的部落政权已与中国发生朝贡关系的一个旁证 ——浦添市博物馆大量“元押”的发现		
第二分会场	(主席: 徐晓望	翻译: 范闽仙)	
寇德忠	琉球文化の复合性		
王耀华	琉球的复合性艺能文化与中琉音乐之比较研究		
徐艺圃	来华琉球难民的“急救篇”——《汉文集》内容评述		
	10:30—10:50	会间休息	
	10:50—12:10	会议发言	
第一分会场	(主席: 徐恭生	翻译: 邱岭)	
郑梁生	明廷对琉球贡使的处置		
陈铮	清末中琉关系变化的思考		
照屋善彦	琉球におけるペリーとバツテルイム——米提督と英宣教医 1853—54年		

第二分会场 (主席: 徐 晓望 翻译: 孙 薇)

上里贤一 琉球官生毛世辉の汉诗について
黄 裔 论中国诗歌对琉球汉诗的影响
郑 王 论琉球王朝时期绘画中的禅道思想

12:10——13:30 午餐
13:30——15:00 会议发言

第一分会场 (主席: 徐 玉虎 翻译: 范闽仙)

西里喜行 毛凤来(富川盛奎)の清国亡命事件とその周辺——新たな救
国请愿書の紹介を兼ねて
高良仓吉 首里城とその复元方法——特に复元の时代设定をめぐって
郑 国珍 琉球进贡使者的多种崇仰习俗及在榕与之相关的史迹考

第二分会场 (主席: 比屋根照夫 翻译: 孙薇、赤岭 守)

秦 国经 中国第一历史档案馆所藏清代中琉关系档案论述
赤岭 守 《历代宝案》編集事业とその課題
孙 薇 辽宁省档案馆所藏の明代の中琉关系史料及びその启示

15:00——15:20 会间休息
15:20——17:10 会议发言

第一分会场 (主席: 徐 玉虎 翻译: 邱 岭)

庄 伯和 福州土猫及其他
徐 晓望 琉球与福建女神信仰之比较
吴屋义胜 冲绳古来の墓式と葬法・副葬品
——宜野湾市真志喜安座间原第一遗迹の检讨から——
胡 沧泽 琉球官制略论

第二分会场 (主席: 比屋根照夫 翻译: 陈宝来)

吴 瀛华 论明清时代琉球朝贡团之组织
方 宝川 关于明初闽人移居琉球若干问题的再思考
林 伟功 明清琉球朝贡与福州港的繁荣
赖 正维 清代福建委派官员护送琉球使臣赴京考

19:00——20:30 晚宴

11月25日	7:30 —12:00	参观鼓山、琉球馆。
	12:00—13:00	午餐
	13:00—	参观琉球墓园后赴泉州

11月26日	8:30—10:00	会议发言
--------	------------	------

第一分会场	(主席: 郑 山玉	翻译: 范闽仙	)
松 浦章	关于乾隆十四年中国商船漂到琉球		
周 光斗	中琉经贸史		
傅 朗	清代中国药材输入琉球考		

第二分会场	(主席: 李 玉昆	翻译: 孙 薇	)
宇江喜ちか子	琉球時代の服飾にみる咒术及び辟邪の思想		
宫城昌保	琉球と中国の交流史にみる食文化の影響		
李 少雄	略论明清时期中国物质文明对琉球的传播和影响		

10:00—10:20	会间休息
10:20—11:40	会议发言

第一分会场	(主席: 郑 山玉	翻译: 邱 岭	)
李 天锡	明清琉球华侨的构成及其对中国传统文化的传播		
川胜 守	《华夷变态》と清・琉球册封关系の形成		
沈 玉水	泉州与琉球友好往来五大事		

第二分会场	(主席: 李 玉昆	翻译: 赤 岭守	)
杨 仲揆	徐葆光在琉球		
陈 培坤	琉球人来华与清朝中央政府各机构之关系考		
谢 必震	齐鲲与《东瀛百咏》		

12:00—13:30	午餐
13:30—17:30	参观海外交通史博物馆、开元寺、古船馆、 天妃宫、来远驿遗址。
18:00—19:00	晚餐
19:30—21:00	文艺节目

11月27日	8:30——10:10	大会专题发言 (主席: 陈捷先 翻译: 邱岭、范闽仙)
杨彦杰 曹永和	明清之际的中琉关系——以琉使入贡为中心 琉球的朝贡贸易与东亚海域交易圈	
	10:10——10:30	会间休息
	10:30——12:10	大会专题发言
池宫正治 徐玉虎	琉球王府の朝賀と進貢 明琉球国王世子尚丰请封袭爵考	
	12:10——13:30	午餐
	13:30——15:10	大会专题发言 (主席: 金城正笃 翻译: 邱岭、范闽仙)
丰见山和行 徐恭生	琉球国の進貢貿易における护送船の意义について 清代琉球接贡制度	
	15:10——15:30	会间休息
	15:30——16:30	会议闭幕式 (主席: 庄善裕 翻译: 范闽仙)
致词	王耀华	
	18:00——20:00	晚宴
11月28日	各代表返回	

谈清代成书的几种琉球方志

陈捷先

方志是中国优良文化产物之一，历史不但悠久，成书的数量也极为可观，同时因其内容特殊，在隋唐以降也成了政府辅治的专书，及至宋元，由于方志又具有了淑世教、美风俗的功能，在发扬儒家伦理与安定社会等方面更作过不少贡献，因此亚洲邻邦无不仿效，大家都采用中国方志的内容与体例，制成了大量的地方性或全国性的地邑志书，韩国、日本、越南等国至今仍存藏着不少的方志作品，原因即在于此。然而早年同在东亚文化圈内的琉球，却是一个例外，他们的本土作者几乎在这方面毫无表现，只有中日两国的专家学者在我国清代期间为他们编写了几部方志，算是弥补了这一缺陷。不过当年中日作家写琉球方志的用心不同，修书的旨趣各异，所得的成果当然就不一样了。我们研究琉球历史文化的人，不能不知道这方面的事，这是本文写作的目的。

本文就清代周煌的《琉球国志略》、日本源君美的《南岛志》、大槻文彦的《琉球新志》、伊地知贞馨的《冲绳志》以及琉球郑秉哲的《琉球国旧记》诸书逐一略作评介，分析各书作者的政治主张与中国方志学对日琉此一文化之影响。

清代に出版された琉球地方誌について

台湾大学 陳捷先

地方誌は中国の古くからの文化財の一つで、その歴史も長く、書物となったのも数が多い。と同時に。その内容的特殊性によって、隋、唐以降は政府の治国参考書にもなり、さらに宋、元以降はそれによって、風儀を正すことができるので、儒家論理の発揚や社会秩序の安定などにも利用される~~される~~ようになった。それが故にアジアの諸隣国では、これに倣わない国もなく、中国の地方誌と同じような内容や、スタイルで編集した、地獄的ないし全国的な地方誌も大量に現われた。韓国や、日本、ベトナムなどの国に、今日でも地方誌がたくさん残っているのはこのためであろう。しかし、琉球は昔から同じく東アジア文化圏にありながら、その例外となっている。琉球人作者による琉球地方誌はほとんどない。あるのは中国や、日本国の学者によって、清代に作られた何部かの琉球地方誌だけである。むろん、これらの琉球地方誌は編集者が中国か日本によって、編集の目的も、趣旨も違っているので、できあがった書物も違っている。したがって、琉球の歴史や、文化を研究しようとするならば、このことが分からなければならない。これが本論の作成目的である。

本論では、清代の周煌による『琉球国志略』や日本国の源君美による『南島志』大槻文彦による『琉球新誌』、伊地知貞馨による『沖縄誌』及び琉球の鄭兼哲による『琉球国旧記』などについて、一々と簡単な紹介をして評価をし、各作者の政治的主張を分析して、日本や琉球の地方誌文化に対する、中国地方誌学の影響を調べることに致しておる。

『呈稟文集』(一部)は沖縄県立博物館が所蔵するもので袋綴六十七丁、収録文書はすべて七十一件であるが、末尾に一部欠損がある。その内訳は呈文四十八件、稟文十五件、報單三件、照会二件、領狀一件、口訓一件、祭文一件となっている。表紙表題の下に小字で「在唐公用」とあり「蔡必達」の署名がある。蔡必達は道光六年(一八二六)進貢兼謝恩のため来市官馬關基(幸地郷方)、正議大夫蔡文龍(崎山親雲上)に随い存留通事として福州に航し、翌道光七年帰国している。『呈稟文集』はこのとき福州に於ける公務処理の参考マニュアルとして蔡必達が携行したものと考えられる。

収録文書はその内容によって十九の門目に細かく分類されている。すなわち(一)漂流別地方求口根〔呈〕 (二)漂流別地方求水相〔呈〕 (三)漂流別地方求撥兵看守〔呈〕 (四)進貢船摘回帰国因逆風暫留〔呈〕 (五)二号船先到請先安插〔呈〕 (六)二号船先到不見頭等船求撥兵看守〔呈〕 (七)二号船先到不見頭等船求通詳酌議先摘安插〔呈〕 (八)館城被冲倒求修理〔呈〕 (九)呈請給示禁止兵士騷擾事〔呈〕 (十)請委百總看館〔稟〕 (十一)貨物被去〔呈〕 (十二)求絲新充館夫〔呈〕 (十三)求人京進貢事〔呈〕 (十四)求給示嚴禁騷擾館服事〔呈〕 (十五)求門官討回饒酒〔呈〕 (十六)咨文查契并理〔呈〕 (十七)請委充土產〔呈〕 (十八)請修整重器〔呈〕 (十九)貿易〔呈〕である。こうした部類分けは参照する場合の利便性を考慮したためだろう。

本文には標点の外難読部分に調点を付し、また特殊な用語には注記を施す。この注記はきわめて有益である。『呈稟文集』は単なる稟文類ではなく年次を欠くものもあるが、収録文書はすべて康・以後嘉慶までの実情の中からこれを採録し、なかでも康・乾隆朝の文書が多数を占める。道光年間の文書は蔡必達が提出したもので、これは行書体で認められており、その他が楷書体であるのも異なる。

呈・稟は下級官衙の官吏が上級官衙の官吏に提出する文書で上行文に属する。存留通事等が福州にあって当面する現実的問題を処理するためには呈・稟の作成に熟練する必要がある。琉球においてはこための特別な対策が講じられていたが、それでも『呈稟文集』のような作成マニュアルを必要としたのである。

呈・稟は公務処理の過程で作成される内部文書であって、表・奏・咨のように対外的な公式記録としては残りにくい。その一部は咨文等に引用される場合があるが、詳細は呈・稟の原史料に拠らなければならぬ。『呈稟文集』によって福州に於ける名信門との交渉の内容を具体的に知ることができると、今度呈・稟史料の発掘収集研究が必要ではないかと考える。

《呈禀文集》小议

系数兼治

《呈禀文集》(一册)为冲绳县立博物馆藏书,线装本67页,收录文书共71份,末尾有缺。所收文书有呈文48份、禀文15份、报单3份、照会7份、领状1份、口词1份、祭文1份。封面标题下方有“在唐公用”四字和署名“梁必达”。梁必达于道光六年(1826)曾以存留通事(翻译)身份随前往进贡与谢恩的紫巾官马开基(幸地亲方)和正议大夫梁文翼(崎山亲云上)渡海到福州,翌年道光七年归国。《呈禀文集》可能就是当时梁必达带往福州供处理公务时参考用的。

集中所收文书据其内容,可细分作十九类。即(1)漂流别地方求口粮(呈)。(2)漂流别地方求水梢(呈)。(3)漂流别地方求拨兵看守(呈)。(4)进贡船摘回归国顺风暂泊、安镇(呈)。(5)二号船先到请先安插(呈)。(6)二号船先到不见头号船拨兵船查探(呈)。(7)二号船先到不见头号船求通详酌议先摘发事(呈)。(8)馆墙被水冲倒求修理(呈)。(9)呈请给示禁止兵丁骚扰事(呈)。(10)请委百总看馆(禀)。(11)货物被去(呈)。(12)求禁新充馆夫(呈)。(13)求入京进贡事(呈)。(14)求给示严禁骚扰馆驿事(呈)。(15)求门官讨回烧酒(呈)。(16)咨文互异舟明(呈)。(17)请变卖土产(呈)。(18)请修整军器(呈)。(19)贸易(呈)。似此分类许是考虑到参照时的方便缘故。

文中除标点符号外,还对难读部分加了标记,并对特殊用语作了注释,这些词语注释极有用外。《呈禀文集》不是单纯的案文集,也有缺少年代的,但所收文书全都取自康熙至嘉庆年间的实际用例。其中以康熙乾隆朝的文书占多数,道光年间的文书是梁必达所撰,都用行书抄写。其它则以楷书抄写,以示不同。

呈禀是下级官衙官员向上级官衙官员提交的文书,属上行文。存留通事等因在福州要处理各种遭遇到的现实问题,故而需要熟练掌握写作呈、禀文的技巧。为此在琉球时曾进行过专门的训练。尽管如此,如《呈禀文集》这样的范文集也还是需要的。

呈禀是在处理公务过程中撰写的内容文书,因此难以象表、奏、咨等作为对外的正式记录保留下来。其中一部分是被引用到了咨文等中,但详细情况还须依据呈、禀中的原始史料判明。根据《呈禀文集》即可具体了解当时在福州和各衙门的交涉内容,今后呈、禀史料的发掘、收集与研究是很有必要的。

在元代琉球群岛部落政权已与中国发生朝贡关系的一个傍证

—— 浦添博物馆大量元押的发现

刘蕙孙

一般史学界认为，琉球群岛与中国的朝贡关系始于明洪武年间。只明初陶宗仪的《书史汇要》说：他在元代已见过琉球向元朝朝贡的贡册，文字为蝌蚪文。冲绳史学家伊波普猷先生在《古琉球》书中，也曾引用其说，但只作为孤证看待。

中华人民共和国建国后，福建省开展文物普查，在仙游糖厂附近，发现铺路石块上有一蝌蚪文字的石刻，其时代似非甚古，拿摹本给我看，亦不认识。后见到上海南洋公学教授英人访问琉球群岛时，在琉球八重山与那国发现了一种图像文字，其与仙游石刻相同，才知道陶宗仪所说确有根据。在元代，至少在琉球群岛上有一部分部落国家与元朝政府发生过朝贡关系。

1988年，我访问冲绳五市，在浦添市博物馆发现一批元押，正好证明元代大陆居民确有人在琉球群岛上活动，而且不是个别。此可作为“陶说”之旁证。

本文正是根据这一发现，提供此次会议讨论贡使问题时参考。

琉球列島の部落政権は元代に既に中国 と朝貢関係を結んだことへの傍証一つ

—— 浦添博物館での元押の大量発見

劉 恵 孫

琉球列島と中国との朝貢関係は、明洪武時代から始まったのだというのが、歴史学界において、常識のようになっている。しかし、明初の陶宗儀はその『書史匯要』でこういっている。「蝌蚪文」（周時代の古文字）で書いた、琉球が元朝廷に朝貢するための「貢冊」は、彼が元代には既にみた。沖縄歴史学者の伊波普猷先生も、その『古琉球』でこれを「孤注」として引いている。

中華人民共和国が成立してから、福建省では文物についての全面調査が行なわれた。その時、仙游県製糖工場の近くで、道路の舗装に使われた石に、蝌蚪文の刻まれたものが一つ見付けられた。その年代はそれほど遠くもないが、何という内容か、翻刻本も見せられた私にも分からなかった。その後、上海南洋公学の英人教授が琉球列島を訪問したが、その時に、琉球八重山与那国で発見された一種の図像文字は仙游石刻のと同じである、とのことを知って、陶宗儀のいうことには確か証拠あることが分かった。したがって、元代に、少なくとも琉球列島の一部の部落国家は既に元朝廷と朝貢関係を結んだのである。

1988年に、私は沖縄五市を訪問した。その時、浦添市博物館でかなりの「元押」（元代の書き判）が展示されていることに気が付いた。この「元押」はその陶宗儀説への傍証になるものであろう。つまり、元代には既に中国大陸から琉球列島に渡ってきて、活動した者がおり、しかも一人か二人ではなかったのだと。

以上のように、本文ではこの発見による考え、思索を述べて、今度のシンポジウムに提出し、朝貢使について検討する時の参考にしたいと思う。

琉球文化の複合性

窪 徳 忠

中国道教の一派の全真教を調べるうちに、私は日中両国の文化交流に関心を持ち、ある時、守庚申や三尸の信仰は、日本の庚申待や庚申信仰の源流ではないかと発表した。しかし、日本民俗学者から猛反撃をうけたので、日本全国の庚申信仰について調査を行い、琉球に赴いた。ところが庚申信仰は片鱗も見出せなかったので、現行の中国的信仰や習俗を調べていた。

ところが、『太上感應篇』を訳した『太上感應篇大意』に三尸の文字がみえ、石垣市立八重山博物館蔵『風水書』（忠順氏良慶筆写本）に「庚申」の項のあるのに気づいた。しかもその文は、1835年大坂刊の『永暦大雑書天文大成』の文と全く同文である。従って、一部の琉球士族が庚申信仰を承知していたことは、確実である。それが、何故中絶したのか、博雅の示教をえたい。

このことから、琉球における中国的信仰や習俗のなかには、中国直接ではなくて、ヤマトを経て伝来したものがあるに相違ないと考え、その考えの許で、2、3の信仰や習俗を眺めている。そこで本日は、その例と覚しきものを1、2のべてみたい。

カマド神の信仰は、現在琉球の代表的な信仰である。一方、中国では前6世紀頃からその信仰がみられ、孔子も言及している。当時は老婦が祀っていたが、前2世紀頃から男性の手に移り、今日に及んでいる。竈神は、初め家人の悪事のみを月晦毎に天帝に告げるとされていたが、唐代以降善悪の双方を告げると変り、上天日も12月23日か24日となった。

『太上感應篇』には、そのことが見えている。

神は美男子とされ、8月3日の聖誕で、妻子もいるとされる一方、祭祀も丁寧になり、悪事を告げさせぬ目的で、竈に酒糟をぬるようになったけれども、のち竈糖を供えるように変った。竈前のタブーも多く、利益は家の平安、大災予防とされている。

琉球では、ヒメカン等とよび三石を神体としたが、今では香炉である。祀るのは女性で、神の性別、名、誕生日には無関心だが、年末に祀る事、タブー、上下天はよく知られている。その一方、奄美の信仰と習合している。

琉球の「三世相」は、『大雑書』の原名の『三世相』が起源と思われ、所謂唐尺の称呼はヤマトからの伝来であり、一方で魯般尺ともいう。現在の頭梁たちが門や墓の入口を唐尺で計るのは、『大雑書』の記載によったためらしい。

以上のように、琉球の中国的信仰や習俗のなかには、ヤマト経由、もしくはヤマト類似のそれがある一方に、天官賜福紫微鸞駕と記し、マ祖をブサと福建的によぶことのように、中国直接の伝来もある。そこで、琉球の文化には複合性があると考えたのである。大方の示教をえたい。

琉球文化的综合性

窪 德忠

我在调查中国道教中的一派——镇教的过程中，对日中两国的文化交流产生了兴趣，曾发现了中国的守庚申和三尸信仰当是日本庚申待和庚申信仰来源的看法，却遭到了日本民俗学者的猛烈攻击。为此我对日本全国的庚申信仰进行了调查，并到了琉球。由于没有发现任何一点庚申信仰的良迹，便对中国现行的信仰和习俗等进行了调查。

调查中我们发现由《太上感应篇》翻译而成的《太上感应篇大意》中有“三尸”一词，石垣市立八重山博物馆藏的《风永书》（忠顺氏良庆抄本）里有“庚申”一项，且其文章与1835年大坂版的《永历大杂书天文大成》中的完全相同。因此可见当时在部分琉球士族中流行过庚申信仰。至于这一信仰后来因何缘故灭亡，则想聆听有关专家的高见。

由此我想：在流行于琉球的中国信仰和习俗中，必定有些不是直接从中国，而是经由日本传来的。基于这种考虑，我们调查了2、3种信仰和习俗，并从中选取一、二例概述如下。

灶神信仰是现在琉球的代表性信仰。中国在公元前六世纪前后即可见有这一信仰，孔子也曾言及。当时的主祭者是老年妇女。但到公元前二世纪前后，祭祀者变为男性，并一直延续至今。初时灶神只将家人所作坏事于每月晦日上告天帝，自唐以后变成将所作善恶事都上告天帝，上天日期也固定成了12月的23日或24日。这在《太上感应篇》中都有记载。

当时的灶神是个美男子，8月23日诞生，有妻小，对其祭祀也很隆重。为了使他不告恶事，人们将酒精涂在灶上，这后来变成了在灶前供奉灶糖的作法。灶前的禁忌也很多，目的是为了保佑家人平安和预防大灾等。

在琉球，祭灶叫作hinukan等，原是以三石为灶神化身，现在改为香炉了。祭祀者是女性，神的性别、名称和生日等无人关心，但大家都很清楚是岁末祭事之一并知道其有关禁忌和上天下凡日期等。另一方面它正和奄美信仰融为一体。

琉球的“三世相”可能源于《大杂书》的原名《三世相》，而“唐尺”这一名称是从日本传来的，它同时也叫作“鲁般尺”。现在的工头们用唐尺量门和墓穴入口等，或许就是根据《大杂书》的记载而沿习下来的吧。

如上所述，在流行于琉球的中国信仰和习俗中，既有经由日本本土传入或与之相似的，也有如记作“天官赐福紫微鸾驾”，按福建习惯将“妈祖”唤作“菩萨”等直接由中国传来的。因此，可以认为琉球文化具有综合性。妥当与否望大家指教。

琉球的复合性艺能文化 与中琉音乐之比较研究

王耀华

本文拟从琉球音乐文化的复合性特点和中琉音乐文化交流的途径与特征分析入手,来探讨中琉音乐文化比较研究的方法问题,以求教于方家。

一、琉球的复合性音乐文化

琉球音乐的复合性特点主要表现在:它即扎根于琉球的固有音乐艺能形式,又从中国音乐吸收了丰富的养分,同时还接受了来自日本本土的影响。其中,最具代表性意义的是琉球三线古典音乐。它是在长期的发展过程中,将琉球的固有音乐艺能文化,与日本本土和中国的音乐文化影响相互交融而形成的一种混合性音乐文化。

二、中琉音乐文化交流之途径与特征

(一) 途径

- 1、随着琉球国王定期入贡中国而移播。
- 2、随着中国朝廷对琉球国王进行册封的册封使团及其活动而传播。
- 3、随着华人迁涉琉球或其他方式的人员来往而移播。
- 4、经由琉球学生来华留学而移播。

(二) 特征

以官方途径为主。由此而产生了活动方式和功能性质的变化。

活动方式:由中国的俗乐往琉球的宫廷音乐转换,然后,再向民间传播,变为琉球的民俗音乐。

功能性质: 娱乐性 → 仪式性 → 娱乐性。
(中国民间) (琉球宫廷) (琉球民间)

三、关于中琉音乐文化之比较研究

(一) 琉球音乐文化的复合性特点与多视角、多层次、多学科的综合性的比较研究。

所谓多视角,是对地域空间而言,应当把琉球置于亚洲和整个世界的大范围之中,认清琉球在亚洲和世界中的位置。

多层次,主要指的是各历史时期的时间层次。在研究过程中,既注意年代的考证,又结合各历史时期的特征,注意地域和其他因素的考察,使各种音乐因素的分析能放置在比较合理的历史时期和地域空间中进行。

同时,借助于历史、文学、语言、宗教、信仰、民俗等多学科的研究成果,在多种因素的相互参照之中,以求更准确地把握音乐艺术因素的特征和地位。

(二) 俗乐的雅化及其追根寻源。

即:对琉球音乐文化某些因素的追根寻源,不仅要从中国雅乐(宫廷音乐)入手,更要把视野扩展到俗乐(民间音乐),以及明代以来的各个时期的音乐。